

まつ せ せい せい きゆう せき  
**松瀬青々旧跡**

(所在地) 海老江四丁目一〇一七

青々は、仏教に大変深い造詣ぞうけいを持ち、南桂寺なんけいで仏教ぶつこうに因ちなんだ俳句はいく十二枚を残すなど海老江の句会創始そうしに大変尽力じんりよくした。天王寺に転居した後も六十八歳で亡くなるまで交流が続けられたという。



【碑文 左】

(正面)

松瀬青々旧跡

(右側面)

捲鳥会

(左側面)

明治廿九年生地

大川町ヨリ移転

大正十年天王寺

一本松に移ル

【碑文 右】

「松瀬青々旧跡」

松瀬青々は明治二年四月船場の薪炭商しんたんの長男として生まれた。本名は弥三郎、北浜小学校を卒業後、丁稚奉公や呉服商をしたが、そのうち、第一銀行大阪支店に入社した。二八歳の頃から俳句を学び「ホトトギス」に投句したのがきっかけで正岡子規と出会い、勤めていた第一銀行を辞めて上京し「ホトトギス」の編集に当たった。明治三三年大阪へ戻り大阪朝日新聞社に入り朝日俳壇を担当していた。翌年「宝船たからぶね」を創刊。大正十年「倦鳥けんちょう」に改題し、没年までこれを主宰した。また、句集「松苗まつなえ」「妻木つまき」などを発刊した。松瀬青々の俳句は、清澄せいちょうな主情的自然詠・人事句にすぐれ、客観写生の高浜虚子と並び称たえられた。この近くの八坂神社境内に松瀬青々の句碑が立っている。

菜の花の はじめや北に 雪の山

明治三九年の年の瀬に、生地の大川町から海老江に移り、大正十年までここに住んでいたことから、碑が建てられたものである。